The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現象学からフーコーへ : 初期ジュディス・バトラーにおける身体論の変遷
Author(s)	藤高, 和輝
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 103-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

現象学からフーコーへ
――初期ジュディス・バトラーにおける身体論の変遷

藤高 和輝

要旨

本稿は、J・バトラーの一九八〇年代における身体論を考察する。バトラーの代名詞といえる『ジェンダー・トラブル』における理論的観点は一挙に形成されたわけではない。それは八〇年代における思索を通じて、ゆっくりと形成されたのである。八〇年代のバトラーにとって、第一義的な問題は身体であり、ジェンダーもそのような思索の延長にある。身体とは何か、身体の問題にいかにアプローチすべきかという問題は、八〇年代のバトラーを悩ませた大きな問題であった。この問題へのアプローチは八〇年代を通じて、「現象学からフーコーへ」の移行として描くことができる。逆にいえば、現象学との対決は『ジェンダー・トラブル』におけるバトラーの理論を生み出すうえでひじょうに重要な契機だった。本稿では、私たちはバトラーの思索において現象学が果たした役割を明らかにし、それがいかにフーコーの系譜学へと移行するかを示したい。

キーワード

バトラー、身体、ヘーゲル、現象学、系譜学

はじめに

身体は、ジュディス・バトラーにとってきわめて重要な思想的課題である。それは、例えば『問題なのは身体だ』（1993年）といった特定の著作に限られることではなく、むしろバトラーの思想全体に関わる問題であるといえる。身体の問題は、すでにバトラーの処女作『欲望の主体』（1987年）において取り上げられており、その後の彼女の思索においても中心的な課題でありつづけているのである。

本稿で論じるのは、バトラーの代名詞ともいえる『ジェンダー・トラブル』（1990年）に至るまでの一九八〇年代における身体論の変遷である。八〇年代におけるバトラーの思想はほとんど研究されていないが、その思索は『ジェンダー・トラブル』を理解するうえでもきわめて重要なものである。本稿では、身体に着目することで、『ジェンダー・トラブル』における理論的観点が八〇年代においていかに形成されたかを示したい。まず、私たちは『欲望の主体』において身体がいかなる問題として提示されているかを考察し、次いで、八〇年代の諸論文からバトラーが身体論をいかに展開していったかをみていく。八〇年代のバトラーの身体論の変遷において、私たちはある種の「転回」が存在することを明らかにするだろう。そして、この「転回」によって、『ジェンダー・トラブル』における、あるいはそれ以降の著作における身体論が可能になったことを示したい。

1.『欲望の主体』における「身体」の問題

まず、『欲望の主体』における身体論を確認しておこう。

『欲望の主体』の内容は大きく二つの構成から成っている。ひとつはヘーゲルの『精神現象学』（以下、『現象学』と略記）の研究であり、第一章では「悟性」章から「自己意識」章の「主人と奴隷の弁証法」が取り上げられている。もうひとつは、二〇世紀フランスにおけるヘーゲル哲学の受容史が考察され、第二章と第三章ではコジェーブ、イポリット、とりわけサルトルが、最後の第四章ではフーコーやデリダ、ラカン、ドゥルーズ、クリステヴァといった「ポストモダン」の世代が、ヘーゲルとの関連で取り上げられ考察されている。このうち、「主人と奴隷の弁証法」を扱った第一章第三節が身体を論じており（そのタイトルは「身体的パラドックス」である）、まずはこの節の議論をみていきたい。

「主人と奴隷の弁証法」はよく知られているように、自己意識が他の自己意識から承認を勝ち取ろうとする「承認を求める闘い」から帰結する。自己意識はみずからの「自由」を他の自己意識から承認してもらうために、他の自己意識を否定する。この「生死を賭けた闘い」の結果、一方の自己意識は自己の生命を省みず自由を獲得するが、他方の自己意識は死を恐れるあまり自己の自由を手放す。前者の自己意識が「主人」であり、後者が「奴隷」である。こうして、主人は「生死を賭けた闘い」の結果、奴隷から承認を勝ち取るのである。

バトラーによれば、「主人と奴隷の弁証法は生の一般化された問題とのあいだの苦闘を暗に示している。主人と奴隷のあいだの労働の分割は、生きようとする欲望と自由であろうとする欲望とのあいだの不一致を前提にしているのである」(SD, p. 55)。奴隷は「生きようとする欲望」の形象であり、生き残るために自由を手放し主人に服従し、主人のために労働することで「身体性(corporeality)」に固執する。反対に、主人は「自由であろうとする欲望」の形象であり、奴隷を働かせることで「身体性」から逃れ、奴隷の生産物を「消費」することで自己の「自由」を享受する。

ところが、よく知られているように、主人の戦略はあくまでも奴隷の労働に依存しているものである。「皮肉なことに、主人の肉体離脱(disembodiment)の企ては欲にまみれた態度となる。物理的世界から離れて、しかし生きるためにそれを要求することで、主人は彼の特権にもかかわらず決して満足されえない受動的な消費者になるのである」(SD, p. 56)。最初の目論見に反して、この弁証法の過程において主人が学ぶのは「生のレッスン」(SD, p. 56)なのである。その反対に、奴隷は「自然物への労働を通して、情け容赦なく与えられた世界を彼自身の自己の反省へと変える自分の能力を発見する」(SD, p. 56)。したがって、生を選び自由を放棄したはずの奴隷が学ぶのはむしろ「自由のレッスン」なのである。しかし、奴隷はあくまで主人の奴隷であり、「彼の行為の作者として自分自身をみる」(SD, p. 56)可能性は奪われている。したがって、奴隷が学ぶ「自由のレッスン」とは、「生きようとする欲望は……自由であろうとする欲望とは統合されえない」(SD, p. 56)という「不一致」の経験である。

このように、主人と奴隷はそれぞれ異なる仕方で「身体性と自由の総合に抵抗する」(SD, p. 55)。その結果、「主人は彼の身体におびえながら生き、他方奴隷は自由におびえながら生きる」のである。このことからバトラーは、「自由」とは「身体を具えた（em-bodied）」ものでなければならないと結論する。「彼

らの敵対関係を解消することは自由の身体化された追及への道を整える」(SD, p. 55)。そして、この「解消」とは「相互承認」によってのみ可能であるとされる。

しかしながら、私たちは、他の自己意識から承認を勝ち取ろうとする自己意識の戦略が、主人と奴隷という形で、「自由」と「生」ないし「身体性」との「不一致」に行き着くことを確認したばかりである。つまり、「相互承認」が実現するためには、自己意識とは異なる他の自己意識、自己とは独立した〈他者 Other〉が存在するというだけでは不可能である。それでは、いかにして「相互承認」は可能なのだろうか。バトラーは次のように述べている。すなわち、「相互承認が唯一可能になるのは、物質的世界(the material world)に対する共有された方向づけの文脈においてのみである」(SD, p. 57)。

ここでいわれている「物質的世界」は「自然的世界」とは異なるものである。「自然的世界」とは「感覚的、知覚的世界」を指しており、それは意識とは区別される対象としての世界である。それはヘーゲルのいう意味での「意識」の対象としての世界であり、そこでは意識と世界は存在論的に区別されている。それに対して、「物質的世界」とバトラーが呼ぶものは、このような「自然的世界」を「変換(transform)」したものであるとされる。ここで重要になるのが、「奴隷」の経験である。「奴隷」は労働を通じて「自然的世界」を「変換」することで、「所与の自然的世界を彼自身の自己を反省＝反映するものへと変換する彼自身の能力を発見する」(SD, p. 56)という「自由のレッスン」を積むのであった。すなわち、「奴隷」の場合は結局その所有者が「主人」であったためにこの試みから疎外されるのであったが、そこでは、自己の「自由」を「物質的世界」として「具体化＝身体化する(embody)」可能性が実現しているのである。したがって、「自己意識は他の自己意識を通して媒介されているだけでなく、それぞれが他者を認識するのは各々が〔自然的〕世界に与えるその形態によってなのである」(SD, p. 57〔〕内は引用者による補足)。「主人」と「奴隷」は、一方は「抽象的な自由」を求めたために、他方は「生」や「身体」に固執するあまり、「敵対関係」に陥ったが、「物質的世界」を媒介にした「相互承認」によってこのような「敵対関係」は「解消」される。このように、バトラーは「主人と奴隷の弁証法」の読解を通して、「自由」が「身体化＝具体化」されなければならないことを強調しており、「身体性」の問題を提起している。

『欲望の主体』におけるバトラーの叙述は、この分析ののち、ヘーゲル哲学を実際に二〇世紀フランス思想という歴史的コンテクストに置く。つまり、ヘーゲルの思想――それは「自由」の「身体化＝具体化」の問題を提示した――をそれ自体、歴史的な場において「具体化」させようとする。コジェーヴ、イポリット、サルトルらが第二章と第三章で、フーコーやデリダ、ラカン、ドゥルーズ、クリステヴァといったポストモダンの世代が第四章で、それぞれヘーゲルの系譜のなかで扱われる。ここで重要なのは、その最後で「ヘーゲルの「克服」に関する最後の反省」として言及されるフーコーである。なぜなら、バトラーは第一章の末尾で論じられた「主人と奴隷の弁証法」が投げかける問題を、フーコーがその系譜学の試みにおいて「再定式化」していると指摘しているからである。一般的なフーコー理解に反して、バトラーは「フーコーが〔……〕生死を賭けた闘いを現代的用語で再定式化している」(SD, p. 230)とみなすのである。このようにバトラーの見立てでは、ヘーゲルにおける「欲望の主体」の旅は最終的にフーコーの系譜学に行き着くものとされる。そこでは、「欲望」の問題は「身体」の問題として再考されることが説かれている(SD, p. 234)。こ

のように、バトラーは『欲望の主体』で、ヘーゲル哲学とそのフランス受容の研究を通じて「身体」の問題を提起し、このテクストはその言明とともに閉じられる。以後、バトラーにとって問題になるのは「身体」であり、「ジェンダー」が問題化されるのもこの筋道においてである(SD, p. 234)。

2.『欲望の主体』の成立過程

私たちは、バトラーがヘーゲル研究を通じて「身体」という「問題」を見出したことを確認した。『欲望の主体』の最後では、この問題はフーコーの系譜学によって探求されることが示唆され、事実、『ジェンダー・トラブル』ではこの系譜学という方法論が彼女の理論的支柱になる。だが、私たちはここでいったん立ち止まり、この過程をよりいっそう吟味したい。私の考えでは、「問題としての身体」を見出したことはいきおいそのままにフーコーの系譜学へとバトラーを導いたわけではないからである。

ここで、『欲望の主体』の成立過程を考慮することは重要である。『欲望の主体』はそもそも一九八四年に学位請求論文として提出されたものを、一九八七年に加筆、修正した上で出版されたものである。一九八四年から一九八七年に行われたこの「修正」は、しかし、単なる校正にとどまるものではない。というのは、一九八四年に提出された時点ではサルトルを考察した第三章までで終わっており、フランス・ポストモダンを扱った章は含まれていなかったと推察されるからである。

さらに、出版に際して付加されたこの章は「若書き」の一種だったとバトラー自身が述懐し(SD, p. viii)、次のように述べている。「一九八五から一九八六年にかけて、私は、〔『欲望の主体』の〕最終章で示し、のちに『ジェンダー・トラブル』を書いている際に形成した理論的運動を行う準備をまるでしていなかった」(SD, p. viii)。バトラーは『欲望の主体』の成立事情をこのように振り返り、読者に本書に対して寛大に接してほしいと要求している(SD, p. viii)。いずれにせよ、『欲望の主体』の最終章はバトラーにとって性急に行われた時期尚早のものだったのであり、その本格的な記述は『ジェンダー・トラブル』に持ち越される。

だが、身体を探求すべき理論的課題として見出した点に関して言えば、すでにヘーゲルからサルトルまでを扱った一九八四年の時点で十分に考察されていたと推察される。私たちがみたように、バトラーは第一章で「主人と奴隷の弁証法」の読解を通じて「身体的パラドックス」を明らかにし、コジェーヴ、イポリット、サルトルに即して分析されているのはこの「パラドックス」が彼らの思想に流れ、反響していることだからである。しかしながら、そのような問題として取りだされた身体に対してどのように理論的にアプローチするのかという点に関して言えば、少なくとも一九八四年の時点ではまだ判然としていなかったと思われる。このように考えると、『ジェンダー・トラブル』以前の八〇年代の彼女の思索において何が問題であったのかが鮮明になる。この時期、バトラーは身体をいかに論じるかという方法論的問題をめぐって思索をめぐらせていたのである。

その際にまずバトラーが着手したのは、メルロ＝ポンティやボーヴォワールの現象学であった。メルロ＝ポンティの「生きられた身体」、ボーヴォワールにおける身体概念及びジェンダーが彼女の研究対象となる。そこで私たちは、バトラーと現象学との関係を考察していくことにしよう。

3. 非デカルト的現象学――バトラー身体論の出発点

『ジェンダー・トラブル』における現象学評価――とりわけ、ボーヴォワール――はきわめて一面的なものである。ボーヴォワールの「ひとは女に生れない、女になる」という有名な言葉を引いて、バトラーは「女になる前の主体」が前提とされていることを批判する。「ボーヴォワールにとって、ジェンダーは「構築された」ものである。しかし彼女の公式では、そのジェンダーを現在、なんらかの方法で身につけたり、手に入れたりしていても、原則的にはべつのジェンダーを身に帯びることも可能な行為主体、コギトが想定されている」(GT, p. 11)。そして、バトラーはこのような「行為主体」や「コギト」を前提としない「構築」の理論を確立することを試みたのであり、とりわけフーコーの「主体化＝服従化」の理論が援用された。

ダイアナ・コールが指摘しているように、『ジェンダー・トラブル』では現象学とポスト構造主義の立場が区別されていることは明瞭である。しかしながら、コールもいうように、この区別は『ジェンダー・トラブル』におけるものであって、それ以前のバトラーの思索において中心的な区別は「デカルト的現象学」と「非デカルト的現象学」の区別であった(Coole, 2008, p. 14)。先に『ジェンダー・トラブル』における現象学評価が一面的であるとしたのも、もともとはバトラー自身が現象学に対して二面的な評価を与えていたからである。そして、興味深いことに、メルロ＝ポンティとボーヴォワールは後者の「非デカルト的現象学」に数えられ、肯定的に評価されているのである。

実際、博士論文を提出した翌年一九八五年に、バトラーは「Geist ist Zeit――ヘーゲルの「絶対者」のフランスにおける諸解釈」という論文で、『欲望の主体』をとくにその第二章の内容を中心に手短にまとめており、そこで彼女はコジェーブやイポリットのヘーゲル的「時間」概念が形而上学的な構造をもつものであるとして批判し、メルロ＝ポンティに別の可能性を見出している。バトラーによれば、メルロ＝ポンティは「時間は身体と欲望の歴史を通して人間のアイデンティティを構造化する」ものであり、したがって、「絶対者は身体的な欲望の歴史として具体化される」とみなした(Butler, 1985, p. 78)。このようなメルロ＝ポンティの現象学に、バトラーは身体の問題を解決する糸口を見出そうとしているのである。

また、この時期にバトラーがボーヴォワールを熱心に取り上げるのも同じ理由からである。バトラーは論文「パフォーマティブ・アクトとジェンダーの構成」（1988年）で、次のように述べている。「ボーヴォワールもメルロ＝ポンティも、身体はある特定の文化的、歴史的な可能性を具体化するための能動的なプロセスであり、それを記述するには身体的な具体化に関する現象学の理論が説明を迫られるような複雑な取り込みのプロセスだと理解している」(Butler, 1988, p. 524)。そして、バトラーはこのような現象学がフェミニズム理論において「適切な出発点」となると主張する。「まずはじめに、文化的なアイデンティティを構成し、それを身にまとうためのさまざまな行為に現象学が注目することは、身体がどのように日常的にジェンダーの型にはめられていくのかをフェミニズムが理解しようとするには適切な出発点となる」(Butler, 1988, p. 525)。このように、バトラーはメルロ＝ポンティとボーヴォワールの現象学を積極的に取り入れているのである。

それでは、両者が指し示す「非デカルト的現象学」とはいったいどのようなものであろうか。それは『ジェンダー・トラブル』で批判されたボーヴォワールの「女になる前の主体」の地位に関わるものだといえ

る。バトラーは「シモーヌ・ド・ボーヴォワールにおけるセックスとジェンダー」（1986年）及び「セックスとジェンダーの変異」（1987年）で「デカルト的現象学」を言語や文化に先立って自我を前提にするものとして、これを批判している。この「デカルト的自我」は「身体をもたない魂(disembodied souls)」とみなされる。それに対して、「非デカルト的現象学」においては、この「自我」は「身体を具えた(embodied)」ものであるとして、バトラーは次のように述べている。「人は女に生れない、女になるということは、この「なる（生成）」が肉体から離れた(disembodied)自由から文化的な身体化(embodiment)への道をたどるということを意味しない。実際、ひとははじめからその身体であり、そしてそののち、そのジェンダーになるのである。セックスからジェンダーへの運動は、身体化された生(embodied life)に内的であり、すなわち、それは一方の身体化(embodiment)から他方の身体化への運動なのである」(Butler, 1987, p. 130)。

このように、バトラーは『ジェンダー・トラブル』とはまったく反対の解釈と評価をボーヴォワールに与えている。『ジェンダー・トラブル』では「デカルト的コギト」が前提とされているかどで非難されていたボーヴォワールは、それ以前の諸論文では「デカルト的コギト」に対する批判者として描かれているのであり、ボーヴォワールの理論には「構築」の前のデカルト的な精神的実体は存在しないとされる。このように、メルロ＝ポンティやボーヴォワールによって素描された「非デカルト的現象学」は、バトラーが自らの身体論を展開するうえで最初の出発点を与えるものであった。

4. 現象学的身体論とフーコーの系譜学

「非デカルト的」と形容されるメルロ＝ポンティやボーヴォワールの現象学は、八〇年代のバトラーにとってきわめて重要な理論であったことがわかる。それでは、バトラーはメルロ＝ポンティ及びボーヴォワールの現象学からどのような身体概念をとりだしたのであろうか。バトラーは「パフォーマティブ・アクトとジェンダーの構成」（1988年）で次のように述べている。

> メルロ＝ポンティによれば、身体は歴史に規定された概念であるだけでなく、絶え間なく現実化されるはずのさまざまな可能性の集合である。彼は身体が歴史に規定された概念だと主張するが、それはすなわち、身体が意味を帯びるのは、現実世界において、具体的でかつ歴史によって媒介された表出を通じてだという意味である。(Butler, 1988, p. 524)

ここで、身体は「可能性の集合」であるとされる。その意味を、バトラーは次の二つの点に整理している。ひとつは、「身体が現実世界において知覚によってどのように捉えられるかは、なにか内的な本質によってあらかじめ決定されているわけではない」(Butler, 1988, p. 524)という点であり、いまひとつは、「世界において身体が具体的に表出されるときには、歴史に規定されたさまざまな可能性の集合のなかの特定のものが選ばれて表出される」(Butler, 1988, p. 524)という点である。したがって、身体はいわば「可能態」と「現実態」の二つの側面をもつものとして理解されているといえよう。

バトラーは身体やジェンダーをフェミニズムの見地から批判的に分析する上で、このような「現象学的な前提に依拠する」とはっきりと主張している。「私がはっきりと思い描いているところでは、ジェンダーの批判的な系譜学は、現象学的な前提に依拠するものである」(Butler, 1988, p. 530)。「現象学的な前提」とは身体を「可能性の集合」と捉えるものである。したがって、ジェンダーの系譜学はその前提にもとづいて、歴史的に構築された身体をその可能性のうちの「特定のもの」とみなすものである。

このようなパースペクティブはフーコーの系譜学とも密接に関連している。のちに、バトラーは『ジェンダー・トラブル』で現象学とフーコーのあいだに切断線を引くことになるが、この時点では「断絶」よりもむしろ「連続」が強調される。この時期のバトラーは、フーコーの系譜学は「現象学的な前提」に則った上で行われなければならないと考えていたのであり、現象学とフーコーは相互補完的な関係であるとみなしていたのである。バトラーは「ボーヴォワールにおけるセックスとジェンダー」(1986年)で次のように述べている。

> ジェンダーの記述に関する二元論的な制限を問いに付すことで、ウィティッグとフーコーは、おそらくはボーヴォワールが想像もしなかったような方法で、セックスからジェンダーを解き放った。しかし、身体を「状況」とみなす彼女の見方はおそらくそのような諸理論の土台を築いたのである。(Butler, 1986, p. 48)

このように、バトラーはフーコーの系譜学がボーヴォワールの理論を裏づけ、補完するものであるとみなしている。このことは、身体の「現象学的前提」に則ってジェンダーの系譜学を試みる八〇年代におけるバトラー自身のプログラムと一致する。

すでにみたように『ジェンダー・トラブル』におけるボーヴォワール評価にはある種の「転回」が認められたが、同様のことは両性具有者である(現在ならインター・セックスと呼ばれるであろう)エルキュリーヌ・バルバンに関するフーコーの分析に対する彼女の評価にも認められる。『ジェンダー・トラブル』ではバルバンに対するフーコーの分析はきびしく批判されている。「フーコーによれば、エルキュリーヌが住むセックス(性差)の世界は、身体の快楽が、一次的な原因や究極の意味としての「セックス」を直接に指し示すことのない世界である。フーコーの言葉を使えば、それは「猫がおらず、猫のニヤニヤ笑いだけが充満する」世界である。〔……〕しかしここで私たちが目にするのは、『性の歴史Ⅰ』のなかでフーコーの分析が放逐しようとする解放主義の言説に、フーコー自身が感傷的に溺れてしまっている様子である」(GT, p. 131)。こうして、バトラーは『性の歴史Ⅰ』における反解放主義の立場から、法や権力から自由なセクシュアリティというフーコーのバルバン分析にみられる見方を批判する。

それに対して、論文「セックスとジェンダーの変異」では、なるほどフーコーのバルバンの分析は「ユートピア的」であるとしながらも、しかし、この論文を丹念に読むと、彼女がこの「ユートピア的可能性」に対して一定の余地を与えていることがうかがえる。

ウィティッグとフーコーは新たなアイデンティティを提供したが、それは……ユートピアなままである。しかし、〔この点で〕ゲイル・ルービンが精神分析を現代のジェンダー・アイデンティティの形態における親族構造の再構築として読み直したことを思い出すことは有用である。もし、彼女がジェンダー・アイデンティティを親族関係の「痕跡」と理解することが正しいのなら、また、ジェンダーがますます親族関係の名残りから自由になると指摘したことが正しいのなら、そのとき私たちは、ジェンダーの歴史はジェンダーをその二元論的制限から次第に解放するものであることを示していると結論を下す根拠をえるように思われる。(Butler, 1987, p. 516)

きわめて曖昧な言い方ではあるが、フーコーやウィティッグが示した「ユートピア的可能性」は現行のジェンダー秩序が変われば現実化しうる、とバトラーはみなしているように思われる。『ジェンダー・トラブル』ではもはや留保なく批判されるフーコーのバルバンの分析に、なぜバトラーはこの時点では一定の可能性を認めていたのであろうか。その理由はやはり、身体の「現象学的前提」に求めることができる。この「前提」において、身体は「可能性の集合」である以上、このようなユートピア的な身体の可能性もまた排除することはできないのである。いや、むしろ、そのような可能性は既存の秩序に対するオルタナティブを提示するものでさえあるだろう。

いずれにせよ、現象学とフーコーの系譜学はこの時期においては相互補完的な理論として描かれている。この時期のバトラーにとって、系譜学は身体の「現象学的前提」という出発点から遂行されねばならないと想定されていたのである。

5. バトラーのメルロ＝ポンティ批判

それでは、『ジェンダー・トラブル』にみられる「転回」はいかにして生じたのであろうか。言い換えれば、バトラーはいかにして「現象学的前提」から離脱し、このような前提抜きの系譜学を構想するに至ったのであろうか。このような「転回」を捉える上で重要なのが「性的イデオロギーと現象学的記述」（1989年）と「フーコーと身体的書き込みのパラドックス」（1989年）の二つの論文である。この節ではまず前者をみていこう。

これまで肯定的に言及されてきたメルロ＝ポンティだが、ここでは事情が異なる[1)]。バトラーはメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』の第一部第五章「性的存在としての身体」を考察している。その章において、メルロ＝ポンティはセクシュアリティを考察している。メルロ＝ポンティは本章のはじめで「われわれが空間とか対象とか道具とかをわれわれに対して存在するようにさせ、それらを己が身にひきうけるようになる、こうした始原的な機能をあきらかにすること、また、こうしたものを己がものとする場としての身体を記述すること――これがわれわれの恒常的な目的である」として、「そこで、ある対象なり存在者なりが欲望とか愛情とかを通してわれわれにとって存在するようになるのはどのようにしてであるか、それを観察するようにつとめるならば、そのことによってわれわれは、やがて対象や存在者が一般に存在することができるのはどのようにしてであるかを、よりよく了解するようになるだろう」と述べている（メル

ロ＝ポンティ、一九六七、二五六頁)。

バトラーは、一方で、このような考察が「自然主義的イデオロギーから自由なセクシュアリティのフェミニスト理論を提供する」(Butler, 1989a, p. 85)可能性を示唆しながら、他方で、それにもかかわらずメルロ＝ポンティの記述には「セクシュアリティのヘテロセクシュアルな性格についての規範的な想定」(Butler, 1989a, p. 86)が認められると批判している。

メルロ＝ポンティは、セクシュアリティを「ひとつの自立した環」としてはみない点で自然主義的な説明から離れている。メルロ＝ポンティによれば、「生物学的実存は人間的実存のなかに噛み合わされており、後者固有のリズムとけっして無関係には存在しない」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二六四頁)。身体やセクシュアリティといった「生物学的実存」をそれ自体独立した領域として描き出すことは不可能なのである。だが、それは「生物学的実存」が実存に「還元」されるということでもないと彼は注意している。「身体とは実存が凝固化または一般化されたものにすぎず、一方、実存の方もひとつの不断の受肉にほかならない」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二七五頁)。実存は「身体の中に己を実現する」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二七四頁)のである。したがって、それは一方が他方を表現するというような一方的な関係ではないのであり、それらは分かちがたく結びついているのである。したがって、セクシュアリティは「本能」にも「実存」にも還元されえない。「セクシュアリティをそれ自体とは別のものに還元してしまうようなセクシュアリティの説明は成り立たない」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二八二頁)のである。セクシュアリティは「認識的ならびに実践的存在の全体と内面的に結合して」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二六一頁)いるのである。

このように、メルロ＝ポンティの理論はセクシュアリティの自然主義的ないし還元主義的な説明を斥けており、それゆえにバトラーはこの点にフェミニスト理論への応用可能性を認めている。しかし他方で、メルロ＝ポンティのこのようなプログラムにもかかわらず、彼もまたセクシュアリティの「自然主義的説明」に陥っている点をバトラーは批判する。そのときにバトラーが問題にするのが、「性的存在としての身体」におけるシュナイダーに関する考察である。

メルロ＝ポンティは暗黙にシュナイダーの「性的無能力」を「異常」として言及している。「或る患者〔シュナイダー〕は、もはや自分で進んでは性行為をまったく求めようとしない。卑猥な絵をみても、性的主題の会話によっても、また女体をみても、この患者には何の欲情も生まれてこない」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二五七頁)。メルロ＝ポンティによれば、「シュナイダーにおいて変質しているものは、色情的な知覚とか経験とかの構造そのものである」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二五九頁)。「正常人においては」、とメルロ＝ポンティは述べている。「身体は単純に任意の一物体として知覚されるようなことはなく、こうした客観的知覚さえも、より隠微な一つの知覚によって浸透されている」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二五九頁)。「これに反してシュナイダーにとっては」とメルロ＝ポンティはつづける。「女性の身体はなんらの特定の本質ももつものではない。彼のいうところによれば、女性を魅力的にしているのはその性格であって、女体としては彼女はどれも似たり寄ったりである」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二五九頁)。詰まるところ、「病人にあって消滅したものは、己れのまえに性的世界を投棄して、自分を色

情的状況のなかに置く能力であり、換言すれば、色情的状況が始まったときこれを維持するなり、あるいはこれを継続して行ってついに堪能するにいたる能力なのである」(メルロ＝ポンティ、一九六七、二五九頁)。このように、メルロ＝ポンティはシュナイダーの「性的無能力」ないしアセクシュアリティを「正常」に対する「異常」として描き出しており、またそのシュナイダーに関する考察は彼自身がどのようなセクシュアリティを「正常」として考えているかを照らし出してもいる。

このようなメルロ＝ポンティの議論において描かれた「正常なセクシュアリティ」に、バトラーはミソジニーの構造を見出している。「シュナイダーを異常とするメルロ＝ポンティの主張にあるのは、脱文脈化された女性身体……が自然な魅力を発するという前提である」(Butler, 1989a, p. 92)。この「女性身体」は主体としては生きていないような対象としての身体である。それに対して、その身体を知覚する主体は男性である。この男性は「奇妙にも肉体離脱した(disembodied)のぞき魔であり、そのセクシュアリティは奇妙にも非-肉体的である」(Butler, 1989a, p. 93)。このように、メルロ＝ポンティがシュナイダーを「異常」とする分析から一体何を「正常」なセクシュアリティとみなしているかが推察されるが、それはきわめてヘテロセクシュアルかつミソジニックなものである。バトラーは「メルロ＝ポンティにとって、女性身体は、男性的欲望の身ぶりを不可避的に喚起する「シェーマ」において見出される「本質」をもつものであり、彼はこの知覚が自然的あるいは機械論的原因によって条件づけられているとは主張しないが、それはそのようは説明が普通与えるのと同じような必然性を持っているように思われる」(Butler, 1989a, p. 94)と述べている。

この分析から彼女は次のように結論づけている。「セクシュアリティを理解するために非-規範的な枠組みを提供しようとする現象学的方法の約束は、錯覚にもとづいていることが判明する」(Butler, 1989a, p. 95)。それは「ヘテロセクシュアルな関係という特定の文化的動態」をあたかも「身体的実存の普遍的構造」であるかのごとくに記述してしまうのである(Butler, 1989a, p. 95)。

私たちがみてきたように、バトラーはまず「現象学的前提」にもとづいた身体やジェンダーの系譜学を探求していた。ところが、いまや、そのような前提そのものが間違っているのではないかという疑念が生じる。たとえ、「構築」以前の主体が「身体を具えた」ものであるにしろ、そこで仮定された身体自体がなんらかの「錯覚」にもとづいているのではないだろうか。それは「特定の文化的動態」を「生きた身体」の「普遍的構造」とみなしているのではないか。このような批判的観点がはっきりと形成されるのは論文「フーコーと身体的書き込みのパラドックス」においてである。

6. 現象学から系譜学へ

八〇年代におけるバトラーは基本的に現象学的身体論とフーコーの系譜学を相互補完的な理論として描いていた。つまり、彼女は「現象学的前提」としての身体の存在論的な次元と歴史的に構築される身体との次元を区別していたのである。そして、バトラーはこのような「現象学的前提」にもとづく系譜学を想定していたのであった。しかし、論文「性的イデオロギーと現象学的記述」でみたように、そのような前提とされる身体の次元そのものが歴史的構築と無縁ではないことが明らかとなった。次に考察する論文「フ

ーコーと身体的書き込みのパラドックス」において、私たちはフーコーの系譜学の試みが現象学的身体論から離脱していく契機をみることができる。そこには現象学に対する直接的な言及はないが、フーコーの系譜学から「現象学的前提」を取り除こうとするバトラーの思索が認められる。実際、バトラーはその最初のパラグラフで次のように述べている。

> 身体とは、言説と権力の体制がみずからを書き込む場であり、法的生産的な権力諸関係にとっての結節点あるいは結合手段である。しかしながら、このように述べると、ある意味でそこにあらかじめ与えられており、身体そのものの見かけ上の構築の場になるよう存在論的に役立てうるひとつの身体が存在する、と例外なく示唆することになる。「身体」と呼ばれるこの場を領域画定するものは何なのだろうか。(Butler, 1986b, p. 601)

このように、バトラーは「構築のプロセスから存在論的に区別される」身体とは何か、と明確に問うている(Butler, 1986b, p. 601)。そして、バトラーはこのような身体そのものという存在論的次元自体を「系譜学的批判に開かれた構築」(Butler, 1986b, p. 602)とみなすよう主張する。したがって、明らかにここでバトラーは「現象学的前提」そのものを系譜学の対象とみなしており、その意味で一種の「転回」を遂げているのである。

このようにバトラーはフーコーの系譜学に接近するのだが、バトラーはフーコーの系譜学のなかにもある種の「現象学的前提」が存在していることを指摘している。

> フーコーが、身体は文化あるいは言説／権力の諸体制の固有の結合の内部で構築されており、これら固有の諸体制の外部においては、身体のいかなる物質性も存在論的独立性も存在しない、と主張したいとしても――そして実際にそう主張しているとしても――、やはり彼の理論はニーチェから借用された系譜学の概念に依拠しているのであり、系譜学は身体を表面とみなし、また一連の不可視の「諸力」……とみなす。……フーコーは、身体とはその文化的書き込みの諸関係の外部には存在しない、と主張しているように思われるが、「書き込み」のメカニズムそれ自体は、身体そのものに対して必然的に外的な権力を含意しているように思われる。(Butler, 1986b, p. 602)

フーコーの系譜学の試みにおいても、身体の存在論的区別が見え隠れしている。「身体は構築される」と主張するとき、どうしても私たちはその文の構造においてそのような「構築」以前に存在する存在論的な身体を前提にせざるをえない。フーコーは、なるほど権力や言説によって身体が構造化されるとしたが、そのような構造化が遂行される「不定詞」としての身体が存在するかどうかという点では曖昧であり、また実際にそのような「不定詞」としての身体の次元を前提にしている節がある。したがって、バトラーは、フーコーにみられる「現象学的前提」の残滓を批判的に乗り越えようとしているのであり、そのような前提をも系譜学の対象とするプログラムを提案しているのである。

そして、やはりここでも、フーコーのエルキュリーヌ・バルバンの分析に対するバトラーの評価がひとつのメルクマールとなるであろう。バトラーは次のように述べている。

> フーコーは時に『性の歴史』第一巻において、あるいは、一九世紀の両性具有者であるエルキュリーヌ・バルバンの日記への短い序文において、身体の表面を打ち破り、統制的体制――「歴史」のある種の悪循環と理解された――によってそうした身体の上に課される文化的一貫性の統制的実践を崩壊させるような身体的諸力の前言説的な多様性に訴えようとする。(Butler, 1986b, p. 607)

しかし、このような「潜在的な前カテゴリー的源泉」と解された身体はそれ自体「前言説的で前歴史的な」ものであり、そのとき文化や歴史はそのような身体に外的に課されるものになってしまう。つまり、文化や歴史は「法的な用語で表現される」ことになる。「これは、権力を法的であると同時に生成的でもあるような諸様態において定式化するというフーコーの言明したプログラムとは反対のものである」(Butler, 1986b, p. 607)。権力の「前」にこのような「潜在的な前カテゴリー的源泉」として身体を位置づけることは、「身体の構築された地位についての彼の議論が証明すると考えられた中心点を最終的に掘り崩してしまう」(Butler, 1986b, p. 607)のである。

この論文に至るまで留保つきとはいえ一定の可能性をみとめていたフーコーのバルバン分析に対して、もはやバトラーは積極的な可能性を認めない。バトラーはこのような「潜在的な前カテゴリー的源泉という前提」、すなわち「前言説的で前歴史的な「身体」」そのものを「系譜学的批判の対象」にすべきだと主張するのである。それは、これまでバトラーが保持していた身体の「現象学的前提」を問うことへの明白な意思表示であるとともに、フーコー自身にまだ残っていた存在論的な身体という同様の前提を取り除き、そのような前提をすら問いに付すものとして系譜学を洗練させようとする試みに他ならない。こうして、バトラーは八〇年代にあれほどのこだわりをもって執着していた「非デカルト的現象学」に対してついに別れを告げることになるのである。

*

「フーコーと身体的書き込み」において素描された哲学的プログラムと『ジェンダー・トラブル』におけるそれとのあいだの距離はもはやほとんど存在しない。事実、バトラーが『ジェンダー・トラブル』以降に行ったのは、「現象学的前提」としての身体の存在論的な次元そのものの系譜学であるといえるからである。したがって、八〇年代に認められた「デカルト的／非デカルト的現象学」という区別はもはやその重要性を失う。後者の「非デカルト的現象学」もまた、身体の存在論的次元をその「構築」以前に前提にしている点で十分に「デカルト的」なのであり、いまやそれは系譜学の対象なのである。

このように、バトラーの八〇年代における身体論の変遷は「現象学からフーコーへ」の「転回」として描くことができるだろう。それはより正確にいえば、「現象学的前提」にもとづいた系譜学からそのような前提をもその対象とする系譜学への移行である。『ジェンダー・トラブル』以降のバトラーの身体論は

このような「転回」を通じてはじめて可能になったといえよう。

おわりに

本論は、バトラーの八〇年代における身体論の変遷をあとづけるものであった。この考察によって、バトラーの身体をめぐる思索がまずは「非デカルト的」と形容される現象学から出発し、次いでこのような現象学的身体論から離脱していくものとして捉えることが可能となった。バトラーは当初からフーコーの系譜学というプログラムに関心を抱いていたようだが、系譜学もまたこの移行に従って、「現象学的前提」に則ったプログラムからこのような「前提」そのものをも系譜学の対象とするようなプログラムへと移り変わっていった。『ジェンダー・トラブル』以降において実行に移される系譜学のプログラムは、八〇年代における現象学との対決を通じてはじめて可能になったといえるだろう。

だが、このことはバトラーが現象学を「乗り越えた」ということを必ずしも意味しない。むしろ、このことが示唆しているのは、サラ・サリーがいうように「バトラーの著作すべてに現象学とヘーゲルが脈々と流れている」(Salih, 2002, p. 43)ことなのである。また、コールがいうように、二〇〇〇年代以降になるとバトラーは現象学を積極的に論じるようになる[2)]。興味深いことに、フェミニスト現象学者であるリサ・フォークマーソン・シェルは、メルロ＝ポンティの「肉の感覚」とバトラーのヴァルネラヴィリティ(傷つきやすさ）とのあいだに必然的な結びつきを見出している(シェル、二〇一四、八六-九〇頁)。実際、バトラーは二〇〇〇年代以降メルロ＝ポンティに関する論文を執筆してもいるし[3)]、メルロ＝ポンティの「肉」概念に関してはたびたび触れている。これらの問題は一九八〇年代のバトラーの思索を対象とする本稿の目的を超えるものであるから、最後に、これを今後の課題として指摘することで本稿を閉じることにしたい。その課題とは、(１) バトラーと現象学の関わりを、一九八〇年代に限らず、より広い視野から考察すること、(２）バトラーの思想が現象学やフェミニスト現象学に与える意味を明らかにすること、の二点である。

注

1)「性的イデオロギーと現象学的記述」の注でバトラーはこの論文が「一九八一年の時点で書かれた」と記している（ただし、一九八一年のものはみつからなかった)。そうだとすれば、メルロ＝ポンティに対する批判的な視点は早い時点から孕まれていたことになる。事実、「Geist ist Zeit――ヘーゲルの「絶対者」のフランスにおける諸解釈」(1985 年)では、メルロ＝ポンティに肯定的な言及を行いつつ、他方で彼の理論も「形而上学的前提から自由であるとはいえない」(Butler, 1985, p. 78) と指摘している（ただし、それがどのような問題であるかは明確には提示されていない)。そうだとすると、本論文の叙述はいくぶん単線的なものであり、事実を簡略化したきらいがあるかもしれない。だが、いずれにせよ、メルロ＝ポンティらの現象学に対してどのような立場をとるかという問題は八〇年代のバトラーを大きく悩ませた問題であったことはたしかだろう。

2）(Coole, 2008, pp. 25-27) を参照。コール自身はこの現象学「回帰」（と彼女が呼ぶもの）を歓迎している。彼女の理解では、『ジェンダー・トラブル』以降のフーコー的パラダイムでは「生きられた身体」を問題にできないからである。バトラーの二〇〇〇年代以降の現象学「回帰」がどのようなものであるかという論点は措いておくが、フーコーの理論では身体を論じることができないという彼女の議論には首肯できない。というのも、本論文でみてきたように、フーコーの理論をバトラーがとりいれたのはあくまで身体の問題をめぐってであるからである。この点で、むしろ

コール自身の方が、『ジェンダー・トラブル』で引かれた現象学／フーコーの切断線にこだわっているように思われる。

3）Butler, Judith, 2004, “Merleau-Ponty and the Touch of Malebranche, in Carman, Taylor and Hansen, Mark, eds., *The Cambridge Companion to Merleau-Ponty*, Cambridge University Press, pp. 181-205. と Butler, Judith, 2006, “Sexual Difference as a Question of Ethics: Alterities of the Flesh in Irigaray and Merleau-Ponty,” in Olkowski, Dorothea and Weiss, Gail, ed., *Feminist Interpretations of Maurice Merleau-Ponty*, pennsylvania University Press, pp. 333-347. を参照。

参考文献

Butler, Judith, 1986, “Sex and Gender in Simone de Beauvoir’s *Second Sex*,” *Yale French Studies*, no. 72, pp. 35-49.

———, 1987, *Subjects of Desire: Hegelian Reflections in Twentieth-Century France*, New York: Columbia University Press.〔SD と略記〕

———,1987, “Variations on Sex and Gender: Beauvoir, Wittig, Foucault,” in Benhabib, Seyla and Cornell, Drucilla, ed., *Feminism as Critique*, Minneapolis: Minnesota University Press, pp. 128-142.

———, 1988, “Performative Acts and Gender Constitution: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory,” *Theatre Journal*, vol. 40, pp. 519-531.（＝一九九五、吉川純子訳「パフォーマティヴ・アクトとジェンダーの構成――現象学とフェミニズム理論」『シアターアーツ』三号、五八 - 七三頁。）

———, 1989a, “Sexual Ideology and Phenomenological Description: A Feminist Critique of Merleau-Ponty’s *Phenomenology of Perception*,” in Allen, Jeffner and Young, Iris Marion, ed., *The Thinking Muse: Feminism and Modern French Philosophy*, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, pp. 85-100.

———, 1989b, “Foucault and the Paradox of Bodily Inscription,” *The Journal of Philosophy*, vol. 86, no. 11, pp.601-607.

———, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York and London: Routledge Press.（＝一九九九（二〇〇六）、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社。）〔GT と略記〕

Coole, Diana, 2008, “Butler’s Phenomenological Existentialism,” in Carver, Terrell and Chambers, Samuel A, ed., *Judith Butler’s Precarious Politics: Critical Encounters*, London and New York: Routledge, pp. 11-27.

シェル、リサ・フォークマーソン、二〇一四、高山佳子、浜渦辰二訳「位置づけられた身体をもつことと家がもつ意味：フェミニスト現象学の視点から」『臨床哲学』vol. 15(2), pp. 74-95。

メルロ＝ポンティ、モーリス、一九六七 (1945)、竹内芳郎、小木貞考訳『知覚の現象学（1）』みすず書房。

Salih, Sara, 2002, Judith Butler, New York and London: Routledge Press.

From Phenomenology to Genealogy: Judith Butler's Early Thought of the Body

Kazuki FUJITAKA

Abstract:

This paper examines Judith Butler's thought regarding the body in the 1980s. Her theoretical perspective in *Gender Trouble* (1990) which has become a synonym for Butler, was not created at once. It was gradually formed thorough her speculations during the 1980s. In this paper, we show how her theory in *Gender Trouble* had been created through her thought in the 1980s. For Butler in the 1980s, the primary problem is the body, where gender is a facet of the problem. What is the body? How should we approach the body? These questions are the problems Butler engages in the 1980s. We can trace her approach to the body in the 1980s as the turn "from phenomenology to genealogy." In turn, her confrontation with phenomenology played a very important part in the establishment of her theory in *Gender Trouble*. Butler first found phenomenology a method for approaching the body, redefining genealogy as theorized by Foucault, thorough her later critique of phenomenology, at least in 1989. In this paper, we illustrate the role played by phenomenology in Butler's thought in the 1980s, and how she shifts from phenomenology to genealogy.

Key Words : Butler, body, Hegel, phenomenology, genealogy